巻頭特集　名古屋市立高杉中学校ラグビー部

3冠奪還に向かって、キックオフ！

大きな体格の選手が激しくぶつかり合い、泥だらけでトライを決める。ラグビーといえばそんなイメージだろうか。しかし、名古屋市立高杉中学校ラグビー部は、少し違う。成長過程にある中学生で細身な体格の選手が多く、素早い動きで、体の大きな相手にも果敢に攻めるプレースタイル。2年生と1年生各15人、30人の新チームが、11年ぶりの3冠獲得に向けて動き出した。

「常に挑戦者の気持ちでいることが大切」と胸に刻んで

創部3年で3冠達成 過去の栄光を取り戻す

現在名古屋市内には、24の中学校にラグビー部がある。メーンとなる大会は1シーズンで3つ。1月中旬から行われる「愛知県中学ラグビー新人大会（以下新人戦）」、5月の「名古屋市中学校総合体育大会」、そして、3年生にとって最後の大会となる11月の「愛知県中学生ラグビーフットボール大会（以下県大会）」だ。どの学校も実力があり、優勝校は毎年異なる熱戦を繰り広げている。

2013年、創立30周年を迎えた高杉中学校。ラグビー部の創設は1998年だ。西区の強豪、名古屋市立西陵高等学校ラグビー部で現在顧問を務める山田和正先生が高杉中学校に赴任したのを機につくられた。その1期生が3年生になった2000年、3つの大会すべてで優勝し、さらに2003年にも3冠達成の伝説をつくり、にわかに強豪チームの仲間入りを果たした。しかし、ここ数年は惜しいところでの敗退が続いている。ラグビーは試合で引き分けても延長戦はなく、抽選で勝敗がつくのだが、一昨年の県大会では優勝校に抽選負けをしている。

11月からの新チームは、3冠奪還を目標とし、日々練習をしている。「秋に引退した3年生は5人しかいなかったので、2年生は試合経験が豊富です。11年ぶりの3冠を十分に狙えるチームだと思います」と話す、現顧問の曾根正博先生。高校時代はラグビー部に所属、大学ではアメフト部のトレーナーをしていた経験があり、3年前、同校ラグビー部の顧問に新任した。「強豪で伝統もある高杉中に着任が決まったときは、プロ野球のドラフト1位指名をもらったようなものだと周囲に言われました」と期待を背負う。

部員は、中学でラグビーを始めた生徒がほとんどだ。小学校時代から「高杉中はラグビー部が強い」と噂を聞いていたり、兄弟がラグビーをしていたりするという。「ラグビーに興味を持って入部する子がほとんどですから、ラグビーを好きになることが、上手くなるために大切です。高杉中の生徒は素直でひたむきな子が多く、いったん好きになると、どんどん成長していきますよ」と続ける。ラグビーの試合をたくさん見せ、昨年は、全国準優勝経験のある奈良県立御所実業高等学校にまで足を運ぶなどして、部員のラグビーへの関心を高めている。

右／顧問の曾根正博先生「ラグビーは試合が終われば敵味方なしという『ノーサイド』の精神が好きです」　中／キャプテンの東崎公一くん「愛知選抜で習ったことを高杉のみんなと共有していきたい」　左／横溝凌くん「パートナーの後輩が上達すると自分もうれしい」

「先を取る」訓練で試合を先制、勝利へ

中学ラグビーは、一般のラグビーとほぼ同じルールだが、スクラムでの押し合いが禁止されている。トライをするには、向かってくる相手に勝つことや素早く走ることが重要だ。「中学生は筋力よりも敏捷性が伸びる時期なので、ラダー（地面に敷いたはしごをまたぐトレーニング）やミニハードルなど、敏捷性を高めるトレーニングを重点的に行っています」と曾根先生。スクラムからボールを取り出し、バックスに与える役目を担うスクラムハーフ2年生の横溝凌くんは、部員の中でも特に小柄だが、「僕よりも大きい人がほとんどですが、恐れないでぶつかっていきます」との力強い言葉。小柄ならではの敏捷性を生かし、自分より大きい体の選手にもちゅうちょなく当たっていく。

ラグビーの試合には人間性がでるそうだ。高杉中ラグビー部では「あいさつ・時間・身だしなみ」といった基本に重きを置いている。「いつも生徒たちには『先を取れ』と言っています。相手より先にあいさつをしたり、真っ先に準備を始めたりすることは、試合を先制することにつながり、勢いがつきます」。ラグビーに番狂わせはないと言われるが、先制点を取ることで勢いをつけ、強い相手にも勝利するラグビーを目指している。

下級生1人につき1人の上級生が付く「指導上級生」という方針も同校ラグビー部の特徴だ。下級生の学校生活全体の行動に上級生が責任をもつというもので、1年生の部員が課題を提出しなかったときは、パートナーの2年生も部活に出ず、課題が終わるのを見届けたこともある。下級生は自然と「先輩に迷惑をかけてはならない」と、責任ある行動を心掛けるようになるのだ。

新チームを率いるのは、愛知選抜に選ばれている2年生の東崎公一くん。「責任感とあきらめない姿勢が誰よりも強いので彼を選びました。試合に送り出すまでは顧問の役目ですがコートに入ったら、キャプテンが指揮を執らなければいけませんからね」と曾根先生。部員たちも納得のキャプテンは、「ラグビーはチームワークがとても大切なスポーツ。家族のようなチームにしたい」と話す。

取材当日は、4校が練習試合を行っていた。青と白のユニフォームを着た選手が相手をかわし、時にぶつかりながら果敢に攻め、何度もトライを決める姿が今年の勢いを感じさせた。新人戦は1月中旬から。「3冠」への1ステップをまずは進めてほしい。

公式戦の前には初代の山田先生時代から受け継がれる決意表明の儀式が行われる。これまでのスライドショーや保護者からの手紙をプレゼントするなど、先生からのサプライズも

2000年に県大会で優勝したときの写真が学校の職員玄関横に飾られている。「3冠を奪還して、この横に自分たちの写真を飾りたいですね」と曾根先生

文／編集室　写真／D-studio　デザイン／GOZEN4JI（HANZO）